

③医療編：十一代藩主斉順病状概要・処方の実際・コレラ（溼瀉病）の家庭療法・漢方薬索引

日記の部分を今少し詳しく述べると、月日、天候、旅の日程、勤務・面会者・診療者・投与の薬名等の一日の出来事が淡々と書かれている。医史学から注目すると、和歌山での勤務日記（五七―二三五頁）の部分は、藩主の診察や病状概要、出勤・帰宅の時間、宿・日直が書かれているので、藩医の活動が良くうかがえる。当時の藩医の勤務には、医療活動以外に藩公とのお供（釣り・船遊び・鷹狩り・花火など）や行事の陪席が含まれていた。そんな所から人間関係が育まれたと思われる。私なら、医療活動だけでも大変なのでそれ以外は心労とを感じるが、当時はのんびりとし人情味もあり名誉と感じたのだろう。

本書は③の医療編だけでも購入する価値は十分である。この編は、藩主斉順の約二か月間の病状（発熱・発汗・戦慄等の表現）と、患者ごとに与えた薬の名と数量がまとめられ、コレラに対する具体的な家庭療法が記され、さらに本書に登場する漢方薬の索引の部分である。しかも、本書はこの編が日記の部分によって補完され、泰淵がその前後に何をしていたのかも知り得て、人間の温もりやリアルさを感じさせてくれるのである。

本書を通して、藩医の勤務振り、匙・奥医師・奥詰医師・番医師・寄合医師・小普請医師が置かれており、江戸幕府の医療制度と比較すると、藩の医療制度もある程度ならついで

ることが確認できた。また、私の興味から言えば、泰淵の治療は内科医であるから基本的には薬を投与しているが、「疝癪のお気味合 お鍼」（二五〇頁）や「（夏目）弾正方癩氣^二而鍼療」（二三七頁）とあり癩に鍼施術を行ったり、「発病 柴圭加葛湯 お鍼」（二五〇頁）、「五助方^一見舞鍼療致」（二三七頁）、「彈正方^一見舞鍼療」（同）とあって、鍼と薬の併用療法を行っている。他所にも度々鍼施術の記載も見える。当時は、内科や外科の医師も鍼施術を行っている例もあるので、ここでも再確認できた。ただ、中村家初代寿泰当経が鍼医師として紀州藩に登用された事と考え合わせると一つ疑問が湧いてくる。幕府の制度は、登用された医療科目が原則的に家系の医療科目として踏襲されて行くので、幕府と藩の制度が違うのか、中村家泰淵までの間に転科の申請をしたのであろうか、不明な点である。

江戸時代の医療や藩医の研究には必携の書なので、ぜひ手に取って御覧になることをお勧めする。

（香取 俊光）

〔かのう書房、東京都神田神保町一―五二、電話〇三―三三九一
一八八八、一九九一年、四六判、二六二頁、定価二〇〇〇円〕

諫早医師会編『諫早医史 一九九〇年』

かつて諫早は佐嘉鍋島藩の属領（龍造寺家）であった。二万五千石から一万石に切り詰められたことから分かるように、

かなり圧政に苦しみ、寛延三年（一七五〇）には、領内に百姓一揆さえ起こっている。医学の面では、当時世界に開かれた唯一の窓、長崎を目前に控えながら、顔は後ろ佐嘉に向けねばならなかった。天保五年（一八三四）から再々行われた諫早領内の医師調査、佐嘉好生館での蘭学学習の強制など、医師に対する圧迫は、明治四年（一八七二）の藩藩置県まで続くことになる。後で分ったことであるが、このような医師調査は、佐嘉藩の他藩に先駆けてのオランダ医学普及のための実態調査という。諫早医史には、こうした歴史的背景があることを考えに入れておく必要がある。また敗戦前後の混乱、昭和三十三年（一九五七）の諫早大水害により、貴重な資料の流失、散布を見たことは残念である。

『諫早医史』は、四〇九頁からなる大冊である。巻頭を旧医家菅原家蔵の「紅夷流道具集解総図」で飾り、第一章幕末の医師概要、第二章明治時代の医療、第三章幕末、明治時代の医師、第四章大正―第二次世界大戦までの医師、第五章戦後から現代へ、第六章関連医療施設、第七章先輩の想い出、第八章物語および旧医師会員略伝、付録、あとがき、からなる。

巻頭の紅夷流道具集解総図は、絵巻と順天堂大学の酒井シヅ教授の解説とからなる。外科道具一覧と用途を示した図鑑で、十八世紀の長崎を中心とした外科を語る貴重な絵巻、資料といえよう。その由来についての考察が述べられている。

第一章は、石橋研究家としても著名な、諫早史談会員であ

る山口祐造氏による「幕末の医師概要」で、一、蘭医の採用、二、佐嘉好生館の活動、と佐嘉藩におけるオランダ医学の取り組みについて述べ、三、諫早領の医師分布、四、嘉永四年医師調査の考察、五、安政六年医師調査の考察、六、天保五年医師調査の考察、七、領内医師調査古文書の意義、と諫早領における医療事情に触れている。

特に天保、嘉永、安政の医師調査は、佐嘉藩におけるオランダ医学の藩内普及に関連して行われたもので、天保五年は医学寮創設、嘉永四年は医学校再建、安政五年は好生館独立の年に当っており、漢方医の医学再教育など、藩内医師の実態把握を目標にしたものと思われる。医師の住所・使命・年齢・診療科目・師匠の名前など克明に記しており、藩政時代の医師の移り変わり、医療分布を知りうる第一級の資料であろう。またこれら資料の中から、地域毎の医師分布、医家世襲（家系）、医家師弟関係一覧表を作成された労を夢とするものである。巻末に添布された医師分布図も他に類を見ない貴重な資料と言えよう。佐嘉藩の調査が日の目を見たことになる。

第二章、明治時代の医療は、郷土史家で、菅原家の縁戚に当たり、純心短大片岡弥吉教授の助手をしておられた永橋親子氏の執筆で、本誌編纂に当たり思いがけず発見された資料を基に、諫早における明治の医療と医師会の歩みを追ったもので、近代の医師会への脱皮の状態を年次的に追うことができる。

第三章は、幕末、明治時代の医師について、当時の諫早地

方の医師会の概況を述べ、この地方で名を残した十七名の医師の医家伝が綴られている。

第四章以下も同様の体裁で、大正、昭和から現在に至る医師会の歩み、医師会員の動静、想い出が語られている。

一地方の医師会史としては、充実した内容を持ち、特に巻頭から第三章に至る部分は、医史的にも大変価値あるものと言えよう。

戦後、昭和二十二年、当時諫早にあつた長崎医大に入學し、医学の道を志した私にとっては、私の体験と重複するところもあり、また懐かしい先輩諸先生の名前を見いだし、感慨入深いものがあつた。編集の労をとられた級友草野源一郎先生に敬意を表するものである。

(山之内外一)

〔諫早医師会発行、諫早市泉町二三一五、電話〇九五七一二一
一〇四〇、一九九一年初版、一九九二年再版、A3判、四〇九
頁、頒価五〇〇〇円〕

小曾戸洋・眞柳誠編・解説『和刻漢籍医書集成』

医史学研究者にとって研究領域の史料・典籍の収集は欠かせない。しかし、調査したい史料・典籍をまとめて所蔵している図書館の数が限られているので、先人研究者は、それぞれの研究テーマに応じて和漢洋の原典・第一次史料を手元に収集しておきたいとする収集家でもあつた。

ところが、原典の収集は、昨今の住宅事情から保管スペースの確保に困難性を増して来ているばかりでなく、市場に流通する古典籍の払底によつて価額の高騰が急速に高まって、個人的収集の困難性に一層の拍車を加えている。

一方、コピー機の発達は、刊本・写本を問わず、コピー版を座右に置くことを可能し、比較的需要の高いものでは、復刻版の刊行が相次ぐようになってきている。しかし、復刻版の中には底本の撰定に問題を残すものがあるのも事実である。だから、基本典籍の書誌的研究を疎かにすることは許されない。

慶長以前の和刻古版については、従来から書誌的研究が熱心に行われていたのに対し、近世以降のものについては、ややもすれば書誌が軽視され、一種類の刊本の入手で安心してしまつて、重版・異本の比較をする努力に欠けていたくらいがなきにしもあらずの現状であつた。とくに、古い著者の没後刊行のものでは、版本のみに頼ることが危険なことは、しばしば経験するところであろう。それに対し、漢籍の基本書は先人研究者の伝統的姿勢とそれを後継する人達の努力によつて、地道ながら、大きな成果が挙げられてきている。

今回完結した、小曾戸洋・眞柳誠両氏の編集・解説になる『和刻漢籍医書集成』は、右のような地道な書誌的研究成果をふまえて撰定された、稀覯書を含む善本を底本としている良質な影印・復刻版である。

収載の典籍は、著名なわが国医書刊行の嚆矢とされる『医